

7. I-131 大量投与3回と外照射後に妊娠および出産した甲状腺癌の一症例

山田日吉丸 照井 頌二

(国立がんセンター・放)

患者は初診時21歳の女子学生で、1978年8月3日、原発不明の多発性肺転移症として国立がんセンターを紹介され来院した。触診を含む諸検査の結果、甲状腺左葉に 3.3×2.5 cmの腫瘍が発見され、最終的に甲状腺癌の肺転移症と診断された。同年9月29日甲状腺全切除術と気管傍リンパ節郭清術施行。組織診断は“papillary carcinoma with predominancy of follicular pattern”でリンパ節転移は9/10であった。同年10月24日 ^{131}I 169 mCi経口投与したところ、肺野の転移巣は急速に縮小した。

1979年5月15日同じく160 mCi投与。肺病巣はさらに縮小したが、残留放射能によるシンチで右臀部と左腰部に集積像が出現した。そこでこれら集積像に対して外照射を併用(臀部6 MeV X-ray 4940 rads, 左腰部同じくX-ray 2800 radsとfast neutron 800 rads)。同年6月27日の胸部X線写真では肺野の病巣は右横隔膜直上部の転移巣以外はほぼ消失した。そこで上記病巣に外照射を追加して消失させた(15 MeV electron 5400 radsとfast neutron 320 rads)。同年11月8日第3回目の ^{131}I 投与(150 mCi)を行ったところ、残留放射能によるシンチで縦隔から心臓をかこむように集積像が出現した。そこで、はじめは広く、ついで徐々に絞って外照射(6 MeV X-ray 950~4750 rads)を加えた(同時にピンクリスチン1 mg×6回投与)。

その後の胸部X線写真には転移巣を思わせる所見はなく、テスト量の ^{131}I によるシンチでも集積像を認めない。

患者は1981年3月15日結婚し、1982年4月27日無事2510 gの正常の女兒を出産した。

8. PA (prostate specific antigen) の精製とそのRIAについて

小川 祐司 森川 惇二 (栄研 ICL)

町田 豊平 三木 誠 (慈大・泌)

前立腺特異抗原(Prostate specific antigen PA)は、1978年Chuらにより前立腺組織より分離・精製された分子量34000の糖蛋白である。この蛋白は、前立腺中のみ存在し、その他の組織中には存在しないことが報告

されており、前立腺癌の腫瘍マーカーとして注目されている。

今回、われわれは、前立腺肥大症組織から、Chuらの方法に準じてPAの精製を試みた。前立腺組織のPBS抽出物を、DEAE Bio-Gel A, Sephadex G-100, G-75カラムクロマトグラフィーを用いて分離し、調製用ディスク電気泳動によりPAを単離した。

精製PAとメスの家兎に免疫し調製した抗PA家兎血清を用いて、血中PAのRadioimmunoassay (RIA)を開発した。測定操作法は、血清検体100 μl を用いた二抗体法である。

本RIAによる正常人30例における血中PA値の平均 $\pm 2\text{S.D.}$ は 17.08 ± 5.9 ng/mlで、今回は正常値の目安として25 ng/ml以下とした。

各種泌尿器疾患別における血中PA値を検討した結果、未治療前立腺癌例で95%の陽性率をえた。しかし前立腺肥大症でも36%の陽性例があり、今後、さらに検討する予定である。なお、前立腺未治療例21についてPAPと対比したが、その相関係数は $r=0.63\%$ であった。またPAP陰性でPAP陽性が3例(14%)に認められ、この辺に臨床的意義があるようである。

9. 固相化抗体を用いる血中TSH濃度測定法の基礎的ならびに臨床的検討

伴 良雄 田上 益光 飯野 史郎

(昭和大学・内分泌代謝)

ホルモンフリーヒト血清を含む標準TSHおよび固相化第2抗体を用いるアマレックスTSHキットの基礎的ならびに臨床的検討を行ったので報告する。対象は正常者20例、バセドウ病患者20例、甲低症患者11例、慢性甲状腺炎患者12例および単純性甲状腺腫患者8例である。結果および考案: 検体200 μl と抗血清を37°C, 90分アッセイ後、標識TSHを加え、さらに37°C, 90分後アマレックス結合第2抗体を加える方法が最適と考えられ、最低検出量は1.9 $\mu\text{V/ml}$ 。Intra- および Inter-assay CVは低濃度で30%および14%であったが、10~30 $\mu\text{V/ml}$ では4.5~1.8%および7.8~3.1%と良好で、ブランクによる高値血清の希釈は可能で、平均添加回収率は94.8%で、GammaDabとの相関は $r=0.95$ ($p<0.001$)で良好であった。正常者は1.6以下~5.6 $\mu\text{V/ml}$ に分布し、1.6以下を示したものは25%で、バセドウ病患者は1.6以下~2.5 $\mu\text{V/ml}$ に分布し、1.6以上を示したものの